

VI 第四の神のことば「安息日を覚えて聖なるものとせよ」(2)

出エジプト 20:8~11、申命記 5:12~15

はじめに

前回に続いて安息日規定の後半を取り上げる。この第四の神のことばは旧約聖書の律法であるから新約時代のキリスト者はもはやそれに縛られる必要がないという考え方があろう。また、安息日の戒めはイエス・キリストによって成就されたから、日曜日は特別な日、聖日ではないという考えもある。預言者イザヤは 58 章 13~14 節に主の聖なる日の過ごし方を述べている。「もし、あなたが安息日に出歩くことをやめ、わたしの聖日に自分の好むことをせず、安息日を『喜びの日』と呼び、【主】の聖日を『栄えある日』と呼び、これを尊んで、自分の道を行かず、自分の好むことを求めず、無駄口を慎むなら、そのとき、あなたは【主】をあなたの喜びとする。わたしはあなたに地の高い所を踏み行かせ、あなたの父ヤコブのゆずりの地であなたを養う。——【主】の御口がそう語られる。」

1. 安息日を喜びの日とする

(1) 主の日の礼拝以外の過ごし方について

10 節に「七日目は、あなたの神、【主】の安息である」とある。この日は、「主」の安息である。神が安息日を設けたのは、人間の肉体的疲れを配慮したというより、その日が主に属しているからである。あくまで主の安息、主に属する安息日、もっと言えば主にとっての安息であって、「人の安息」と呼ぶことは決してない。つまり、神の民は神のためにこの日の全時間をとるべきだということを強調する。

しかも、これは神の民にとって根本的な必要であり、その生きている目的だということも。これこそ、喜びと祝福の根源である。果たして私どもは神のために時間を十分とっているだろうか、自己吟味しなければならない。公的な礼拝時間以外に、神のために時間を取り分けることが求められていないだろうか。礼拝後の時間が自由であるならばその使い方が問われているのだと。

(2) 主の日の礼拝後、家庭でどのように過ごしているだろうか

教会で主の日をどのように過ごすのかということについてもすでに話たのだが、礼拝後家に帰ってどのように過ごしていけばよいかということについて述べる。

総体的に言えば生けるまことの神とのより親密な交わりのためにこの日を用いるべきだということを申し上げる。この日は、月曜日からの日々の労働から目を転じて見えない神との霊的な交わりに立ち返って、教会での喜びの礼拝をささげてきたのである。礼拝は窮屈で退屈だからさぼってアウトドア生活を楽しもうというのではない。きちんと礼拝を守る義務は果たした後は、自分の時間を楽しもうと考えるのはいけないのか。

ここで、ユダヤ人たちの安息日の過ごし方を参考に見ておきたい。彼らにとっては、その日は「楽しみの日」「喜びの日」である。安息日は聖書通り、日が沈むと開始される。ランプの灯りが灯され、最上の服を着て、客を迎え、食事をたっぷり用意してお

き、食べたり飲んだりしたのである。後の時間は神の教えについて用いたのである。子どもたちはその日を待ち望んでいた。これらのことは現代のクリスチャンホームの大きいに参考になると考える。家族団らんの日、休息の日、親しい気の置けない招待客との団らんの時に用いるのである。主イエスの安息日の午後の用い方の記事を参考にできる。「ある安息日のこと、イエスは食事をするために、パリサイ派のある指導者の家に入られた。そのとき人々はじっとイエスを見つめていた」(ルカ 14:1)。これはパリサイ派の指導者の食事会に招かれて、その招きに応じられたということであった。

③安息日を守る主イエスの模範

① 実に幸いなことであるが私どもには生きた最高の見本がある

それはイエス・キリストの模範である。主イエスはこの地上においてユダヤの国で安息日を過ごされた。まず、安息日とご自身の関係を述べておられる福音書のテキストを見る。「安息日は人のために設けられたのです。人が安息日のために造られたのではありません。ですから、人の子は安息日にも主です」(マルコ 2:27~28)。つまり、イエス・キリストは安息日においても主であられ、主の日それはイエス・キリストの日でもあるというべきである。主の日に関する権威のすべてはこの方が持つておられる。それゆえ、主イエスの模範に倣うことは当然であり最もふさわしいのである。

② イエス・キリストと安息日

福音書を見ると、主イエスは安息日を守ることで何度も律法学者やパリサイ人とぶつかり、しばしば安息日の戒めを破っていると非難され続けておられた。主イエスは当時の人々が習慣的・律法的に安息日を守るようには守っておられなかった。その安息日に対する態度は革命的であった。しかも主イエスは、律法を成就するものとして、また安息日の主として、さらに安息日の実体として明確な自覚をもって歩まれた。当時のユダヤの宗教的指導者たちの誤った考えに関しては敢然として立ち向かわれたのであるが、安息日に関する戒めを破ったり、廃止する宣言をなさらなかった。当時の誤った考えとは、人々がこの第四の神のことばを拡大解釈し、次々と細則を付け加え、ただ、人間の作った規則を守るために本来の安息日の目的を見失わせていたということである。神が本来与えられた恵みの意図は失われ、冷たい律法主義が一般のユダヤ人民衆を縛り付けていたからである。

③ 具体的な福音書のテキスト

「イエスは彼らの会堂で教え、すべての人に称賛された。それからイエスはご自分が育ったナザレに行き、いつもしているとおり安息日に会堂に入り、朗読しようとして立たれた」(ルカ 4:15~16)。「いつもしているとおり」という表現は、それが毎週の「習慣」であったことを意味している。同じ4章31節には「それからイエスは、ガラヤの町カペナウムに下られた。そして安息日には人々を教えておられた」とある。これらの箇所は、主イエスが安息日に神を礼拝し、聖書を朗読し、祈るための特別な日として過ごされたことを示している。主イエスが安息日本来の目的に沿って、この日を神

の前に聖なる日として過ごされたことは明らかである。牧師である自分のことに関係するが、「また、安息日に宮にいる祭司たちは安息日を汚しても咎を免れる、ということを律法で読んだことがないのですか」(マタイ 12:5) という主のことばで、宮にいる祭司は主の働きをしているので、その働きは当時の基準からは安息日を破っているように見えても、実は安息日を破っていなかったことがわかる。同様に私も安息日律法の本質に背いていないということで、胸をなでおろす。

2. 主の日は安息日と違う

(1) ユダヤ教の中心であった安息日規定とイエス・キリスト

イエス・キリストの時代のパリサイ派と律法学者は安息日に関して極めて詳細な規定を作り、彼らが作った安息日の規定を厳格に守ることが、ユダヤ教にとって全てであるかのような印象を与えていた。主イエスはこのパリサイ派・律法主義者の安息日の守り方を厳しく批判されたのである。

一つの出来事を見てみる。「イエスは彼に言われた。『起きて床を取り上げ、歩きなさい。』すると、すぐにその人は治って、床を取り上げて歩き出した。ところが、その日は安息日であった。そこでユダヤ人たちは、その癒やされた人に、『今日は安息日だ。床を取り上げることは許されていない』と言った。しかし、その人は彼らに答えた。『私を治してくださった方が、“床を取り上げて歩け”と私に言われたのです。』 彼らは尋ねた。『取り上げて歩け』とあなたに言った人はだれなのか」(ヨハネ 5:8~12)。これは、イエスの安息日の行動に対するユダヤ人の非難と迫害の記録である。ユダヤ人の詰問に対する主イエスの答えは、続く 17 節、18 節にある。『わたしの父は今に至るまで働いておられます。それでわたしも働いているのです。』そのためユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうとするようになった。イエスが安息日を破ってただけでなく、神をご自分の父と呼び、ご自分を神と等しくされたからである。」

この結末を使徒パウロは聖霊によって断定する。「こういうわけですから、食べ物と飲み物について、あるいは祭りや新月や安息日のことで、だれかがあなたがたを批判することがあってはなりません。これらは、来たるべきものの影であって、本体はキリストにあります」(コロサイ 2:17~18)。安息日の本体であられるイエス・キリストは、機械的に文字に拘泥し安息日遵守を主張する律法主義者に批判的であった。

(2) 主の日の始まりの歴史

安息日の成就者キリストは、復活によって新しい神殿となられ、ご自分を通して神を現わされた。ヨハネの福音書 2 章 19 節~22 節を記載する。「イエスは彼らに答えられた。『この神殿を壊してみなさい。わたしは、三日でそれをよみがえらせる。』そこで、ユダヤ人たちは言った。『この神殿は建てるのに四十六年かかった。あなたはそれを三日でよみがえらせるのか』。しかし、イエスはご自分のからだという神殿について語られたのであった。それで、イエスが死人の中からよみがえられたとき、弟子たちは、イ

エスがこのように言われたことを思い起こして、聖書とイエスが言われたことばを信じた。」

主イエスは日曜日に復活されたと記録されている。「さて、週の初めの日、朝早くまだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓にやって来て、墓から石が取りのけられているのを見た」(ヨハネ 20:1)。そして、日曜日ごとに復活の御姿を現されたのである。

(ヨハネ 20:19、ヨハネ 20:26)。

こうしてキリストの霊を受けた教会は日曜のたびごとに礼拝に集まるようになった。「週の初めの日に、私たちはパンを裂くために集まった。パウロは翌日に出発することになっていたので、人々と語り合い、夜中まで語り続けた」(使徒 20:7)。

エジプトから救出されてイスラエル民族だけの生活が許されたかつての日々と違って、異教徒との共同生活を避けるわけにいかなくなった初代教会は、日曜の夜に礼拝をおこなうようになったのである。それは、日曜日に労働を強いられていた奴隷階級の信者が多くいたからであろう。「週の初めの日に、私たちはパンを裂くために集まった。

(3)日曜日を安息日にしない

主の日は週の第一日目であり、キリスト復活の日であることはすでに述べた。初代教会のユダヤ人キリスト者は第七日目には安息日を守り、主の日にも仕事の後で集まっていた。しかし、やがて主の日だけを守るようになってきた。その日の労働を終えて集まるか、早朝カタコンベ(地下墓所)に集まってパン割きをした時もあったであろう。

やがて、キリスト教がローマ帝国の国教となると、安息日規定が日曜日に入れ替わったと思われる。

宗教改革者たちは、共通して、第四戒の安息日を主の日と同一視することに反対している。イエス・キリストの贖いの完成とともに、祭儀規定と深くかかわる安息日は廃止されたという見解に基づくからである。しかし、英国で、国王が日曜日にスポーツを奨励するいやがらせ政策に抵抗して、ピューリタンは主の日＝安息日厳守を強く主張する。ピューリタンのこの信仰はアメリカ・ピューリタンを經由して日本に伝わったのである。それが律法主義的な影響となっていることも知っておきたい。

むすび

安息日規定の第四の神のことばを二回にわたって学んできた。この項の最後に来るべき永遠の安息のついてみことばに聴く。それがヘブル人への手紙4章である。聖書記者は、創造第七日目の安息と、カナンの地に入る安息と、キリストの再臨によりたらされる真の安息の三つの側面から述べている。その結論は「したがって、安息日の休みは、神の民のためにまだ残されています」(ヘブル 4:9)ということである。永遠の安息に導き入れる大祭司イエス・キリストによる救いを信じる幸いを伝えている。(ヘブル 4:14~16)。そして、パトモスに流された使徒ヨハネは栄光に輝く主幻を見ます。(黙示録 1:9~10)。この幻を与えられたのは「主の日」であった。